2014・2018年度短期大学生調査の比較分析による経年変化の考察

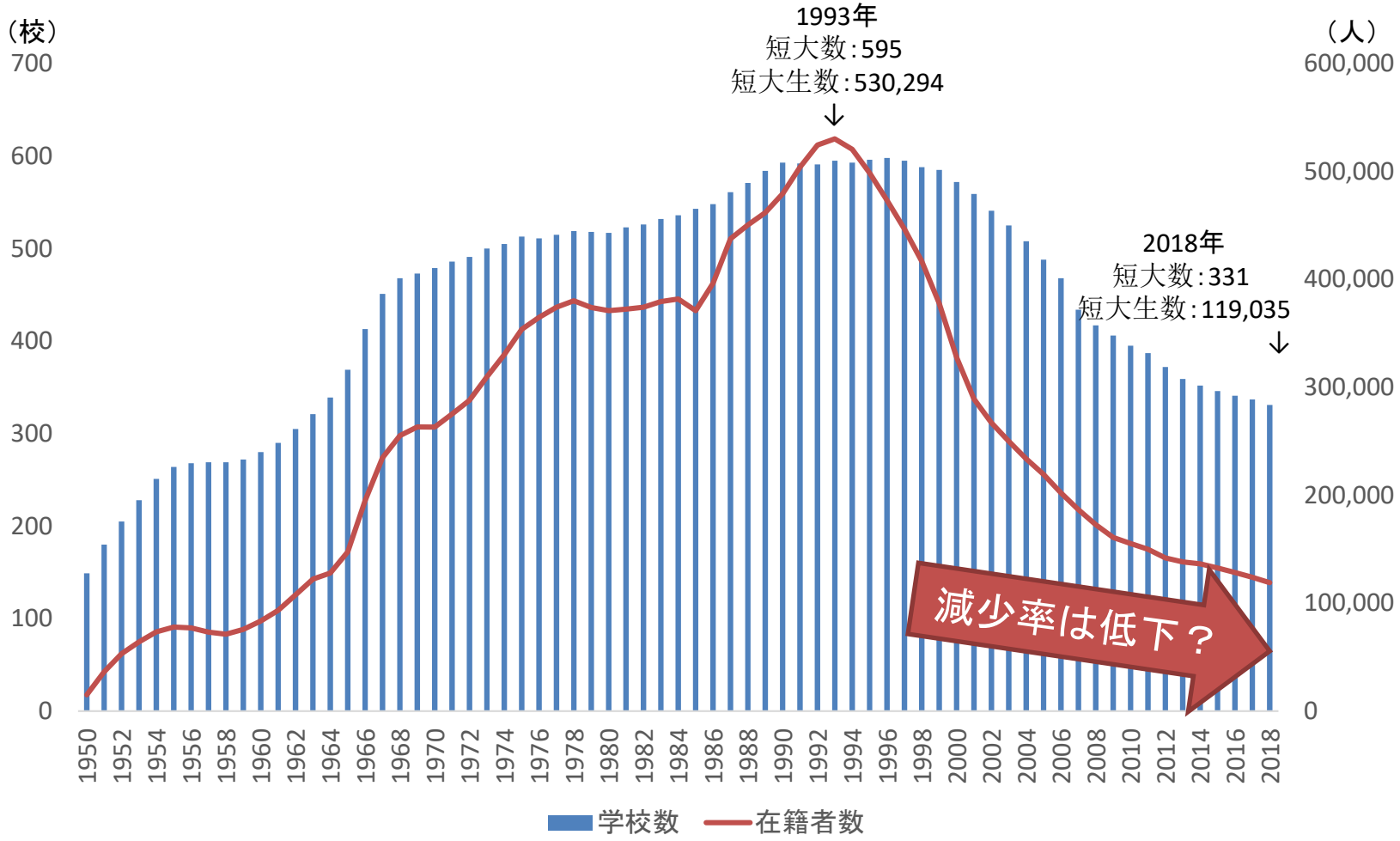
2019.06.01＠玉川大学

〇宮里翔大（桜美林大学大学院）
〇堺完（大分大学）
山崎慎一（桜美林大学）
黄海玉（短期大学基準協会）

発表概要

・短期大学を取り巻く状況
・本研究の問題意識
・短期大学生調査（*Tandaiseichosa*)とは
・分析結果
・まとめと今後の検討課題

短期大学を取り巻く状況（1）
―学校数・在学生数の推移―



短期大学を取り巻く状況（2）
ー自県内進学率ー

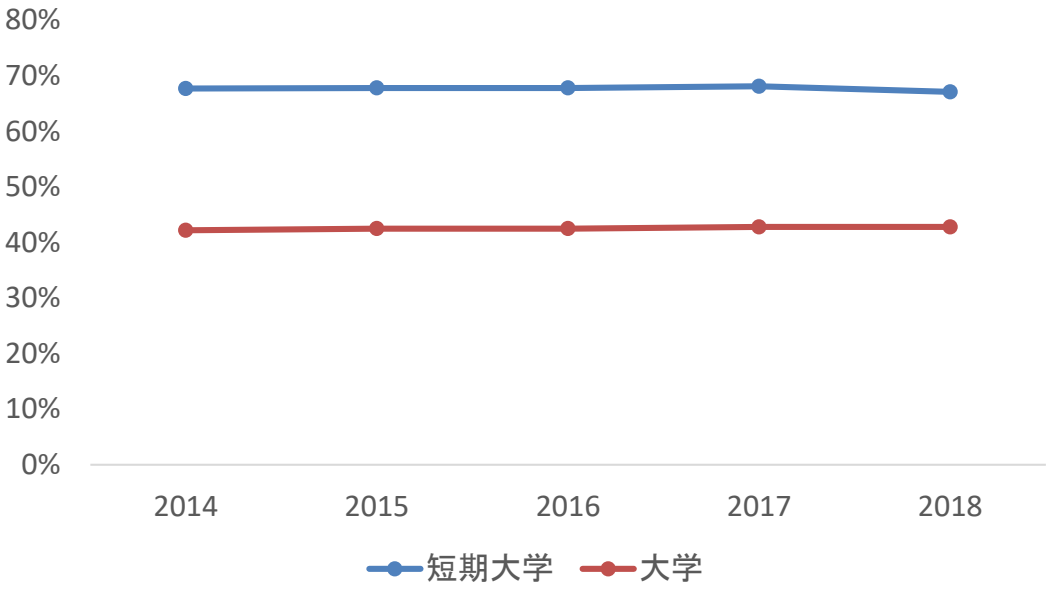


表　自県内就職率

	短期大学	大学
2014	67.7%	42.2%
2015	67.8%	42.5%
2016	67.8%	42.5%
2017	68.1%	42.8%
2018	67.1%	42.8%

短期大学の自県内進学率は約68%程度を推移している。
⇒「地域に根差した高等教育機関として」短期大学が機能している。

短期大学を取り巻く状況(3)
ー分野別在籍者数ー

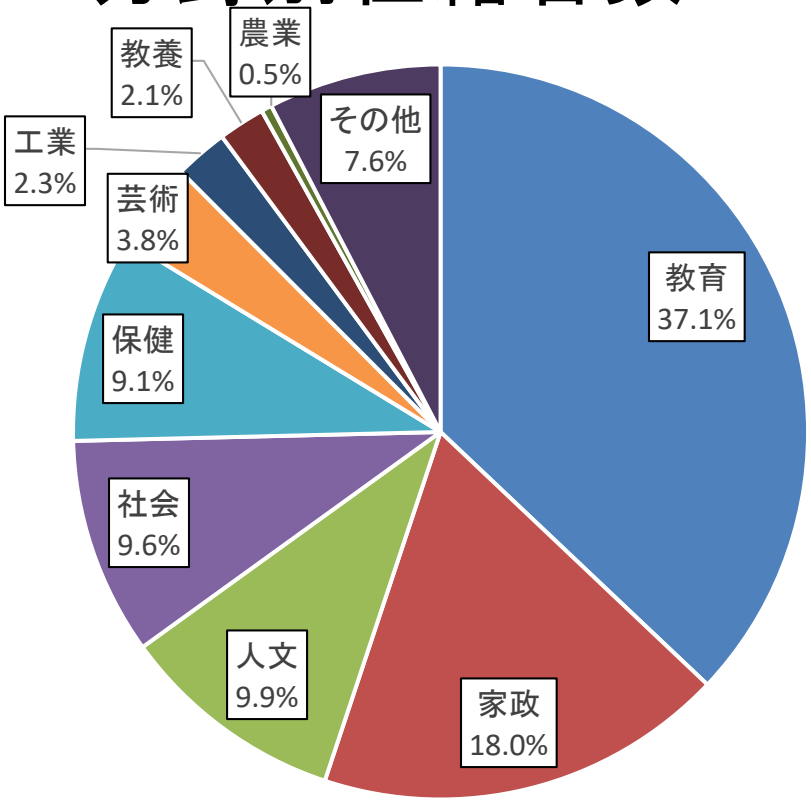


表　分野別在籍者数

	在籍者数	比率
教育	42,539	37.1%
家政	20,700	18.0%
人文	11,418	9.9%
社会	10,978	9.6%
保健	10,441	9.1%
芸術	4,379	3.8%
工業	2,680	2.3%
教養	2,357	2.1%
農業	538	0.5%
その他	8,744	7.6%
合計	114,774	100.0%

人材需要が高い領域である、保育・栄養・看護などの人材を積極的に養成している。

⇒「地域のニーズに合わせた人材養成」を積極的に養成。

短期大学を取り巻く状況（4）
ー日本の高等教育における短期大学の役割ー

「短期大学の今後の在り方について（審議まとめ）」
　短期大学士課程の特長や役割、機能

・学位が取得できる短期高等教育機関
・教養教育と専門教育のバランスの取れた高等教育機関
・職業能力を育成する高等教育機関
・小規模できめ細かい教育を行う高等教育機関
・アクセスしやすい身近な高等教育機関
・教育の質が保証された高等教育機関

短期大学を取り巻く状況（5）
―短期大学が今後求められる役割―

「短期大学の今後の在り方について（審議まとめ）」
短期大学が今後求められる役割

（1）社会基盤の維持・向上を担う職業人材の養成
⇒専門職業人材の養成

（2）地域に密着した高等教育機関としての活用
⇒地域コミュニティの基盤となる人材の養成～

（3）高等教育のファーストステージとしての期待と可能性
⇒知識基盤社会に対応した教養的素養を有する人材の養成

（4）生涯学習機能の充実
⇒多様な生涯学習の機会の提供

本研究の問題意識

本研究の問題意識

縮小傾向にある短期大学であるが、そこで学ぶ学生がどのように意識し、評価しているのかを検討する。
⇒その結果から短期大学での学びが、どのような点が有効に機能し、また改善すべきなのかを検討する。

そこで、
最も学生数の多い「幼児・保育」分野の学生の、回答結果にどのような変化があるのかを、2015年から2018年までの調査データを用いて、全体的な傾向を確認する。また、短期大学の総合的な満足度によって、どのよう変化が生じるのかを検討する。

短期大学生調査（*Tandaiseichosa*)とは

・短期大学基準協会調査研究委員会が、
「短期大学における主体的改革・改善に資する自己評価方法に関する調査研究」の課題の下、「短期大学における学習効果測定法の開発」として、2008年より実施する学生調査。
2014年に日本の短期大学の実情に合わせ、全面改訂され、現在に至る。

・「自己点検・評価の資料となって認証評価への対応に役立つだけでなく、自校の強みや弱みを把握」することが可能。（短期大学生調査パンフレットより）

・調査費用は学生1人当たり150円（例：300人の場合、45,000円）
学科専攻課程別は1学科2,700円。

短期大学生調査（*Tandaiseichosa*）の概要

調査時期
　2014年度：2014年11月上旬～12月上旬
　2018年度：2018年9月上旬～12月上旬

分析対象校と分析対象人数
　学校数：31校
　学生数：2014年度7,960人（調査全体：44校12,093名）
　　2018年度9,555人（調査全体：62校18,656名）

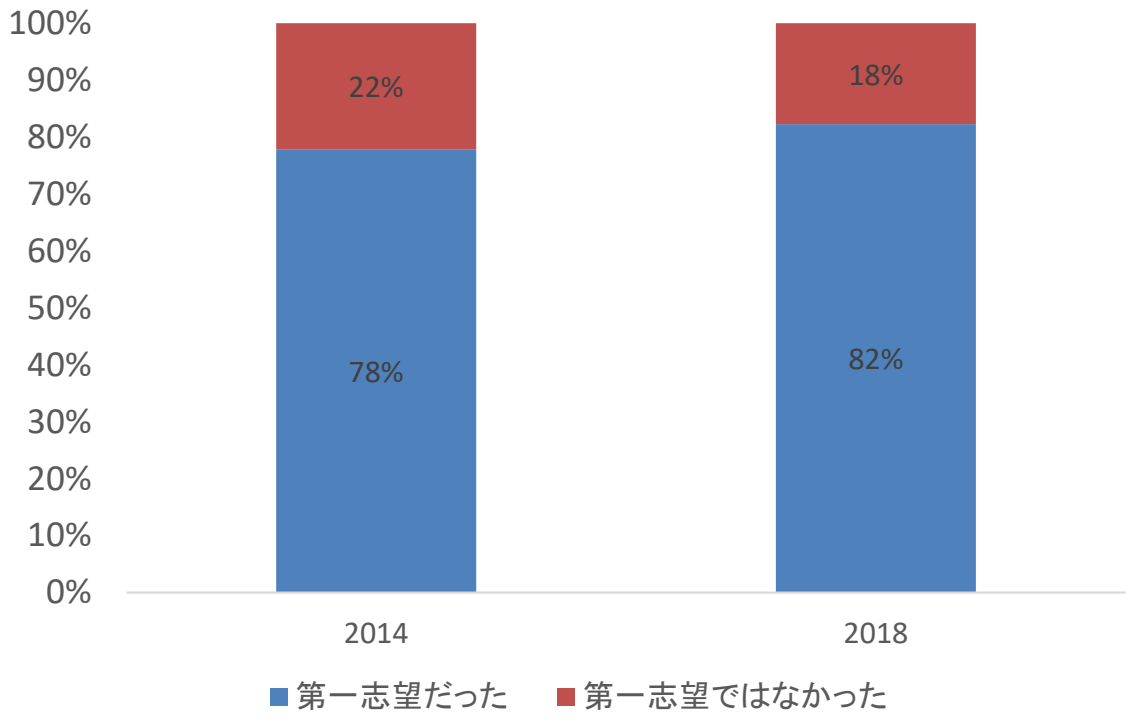
調査の詳細は、以下のwebサイトをご覧ください。
　http://www.jaca.or.jp/service/other/research/tandaiseichosa.html

分析結果

・短期大学の志望順位
・短期大学への進学動機
・短期大学での学習経験
・短期大学入学後の知識・能力の変化
・短期大学に対する満足度
・短期大学に対する総合評価

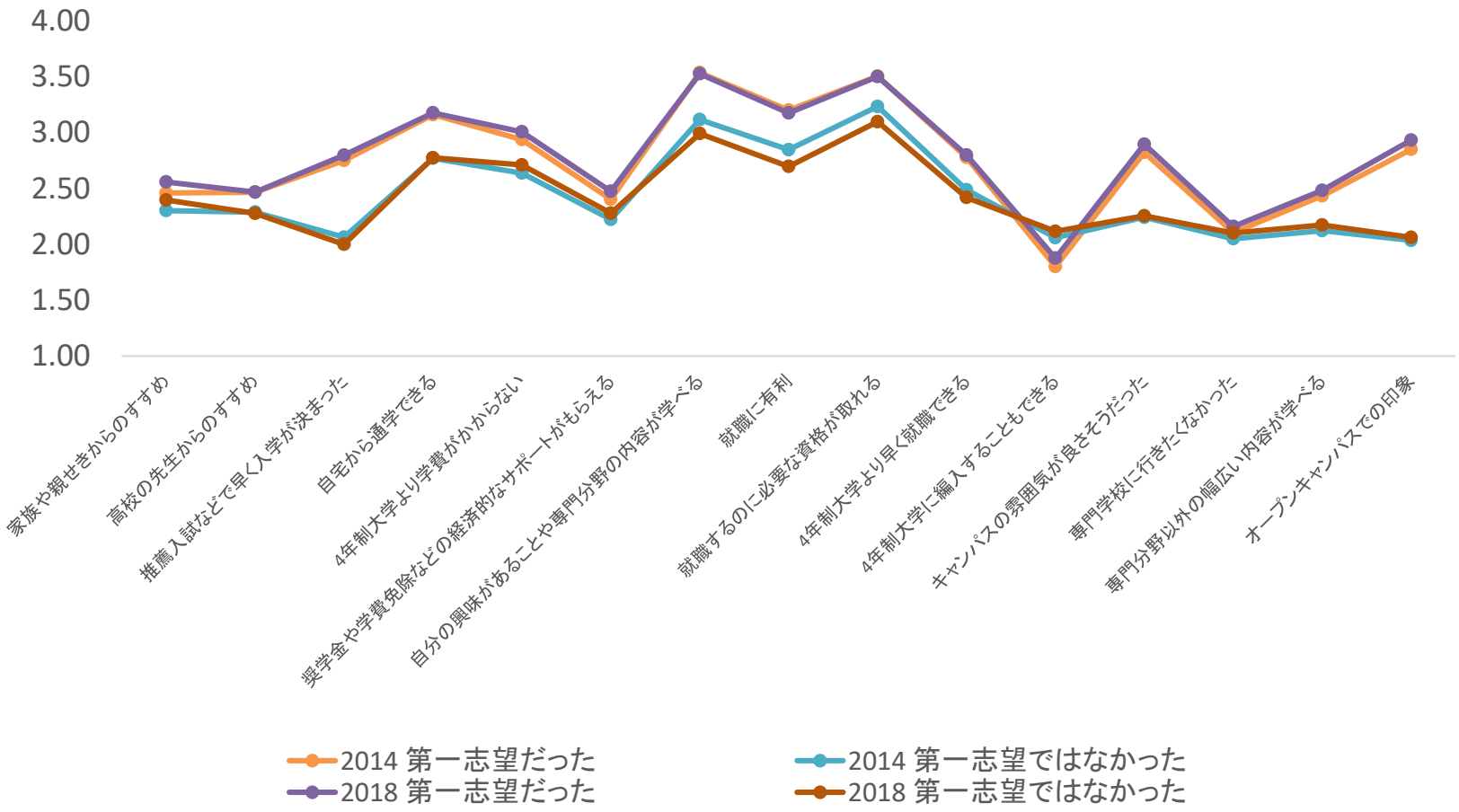
短期大学の志望順位

短期大学を志望した順位についてみると、2014年では第一志望の割合が約78%であったが、2018年では約82%とやや上昇している。



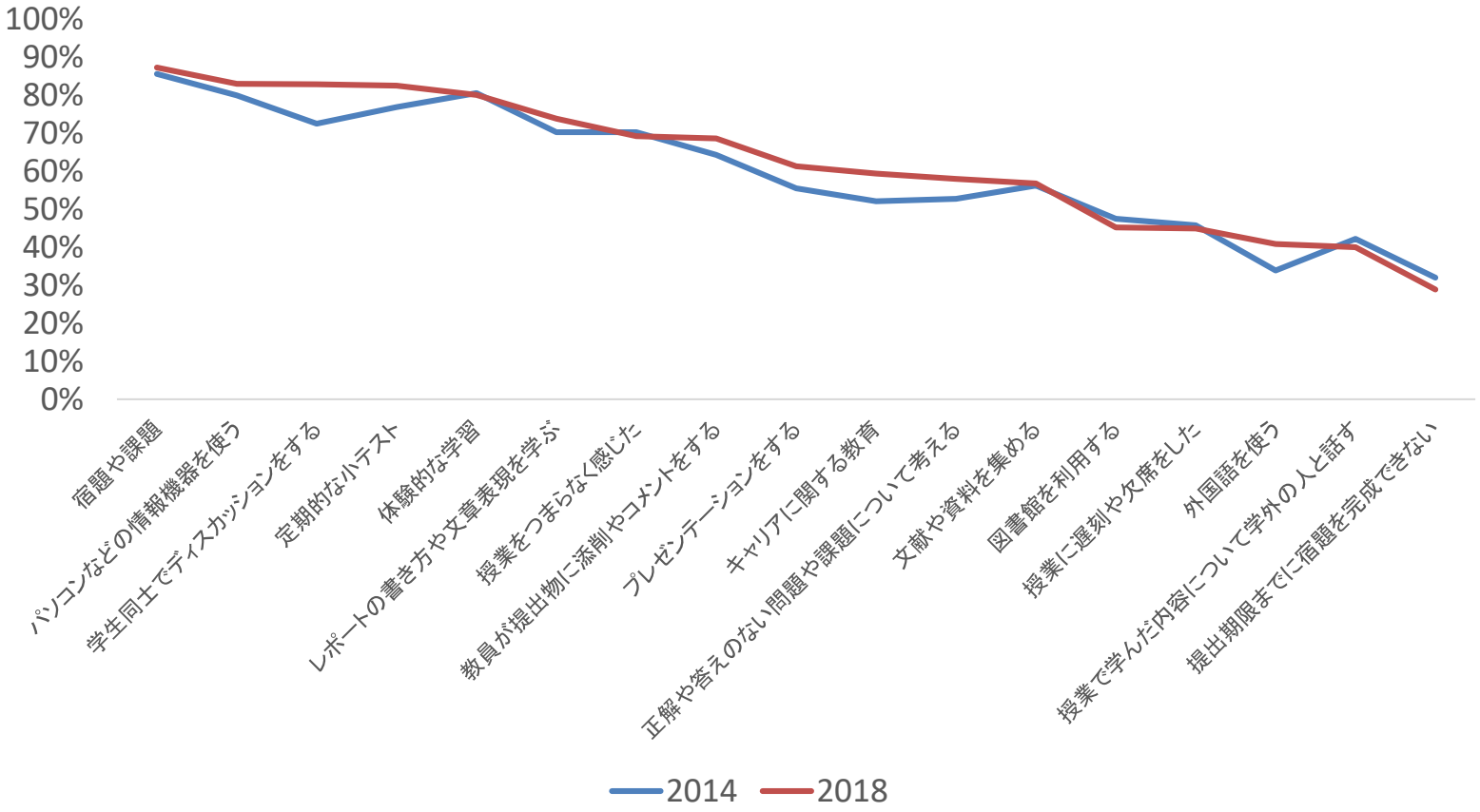
短期大学への進学動機

就職に関連する資格取得、就職に直結する専門分野を学ぶことが高い。2014年と2018年ではほとんど同じ回答傾向にある。



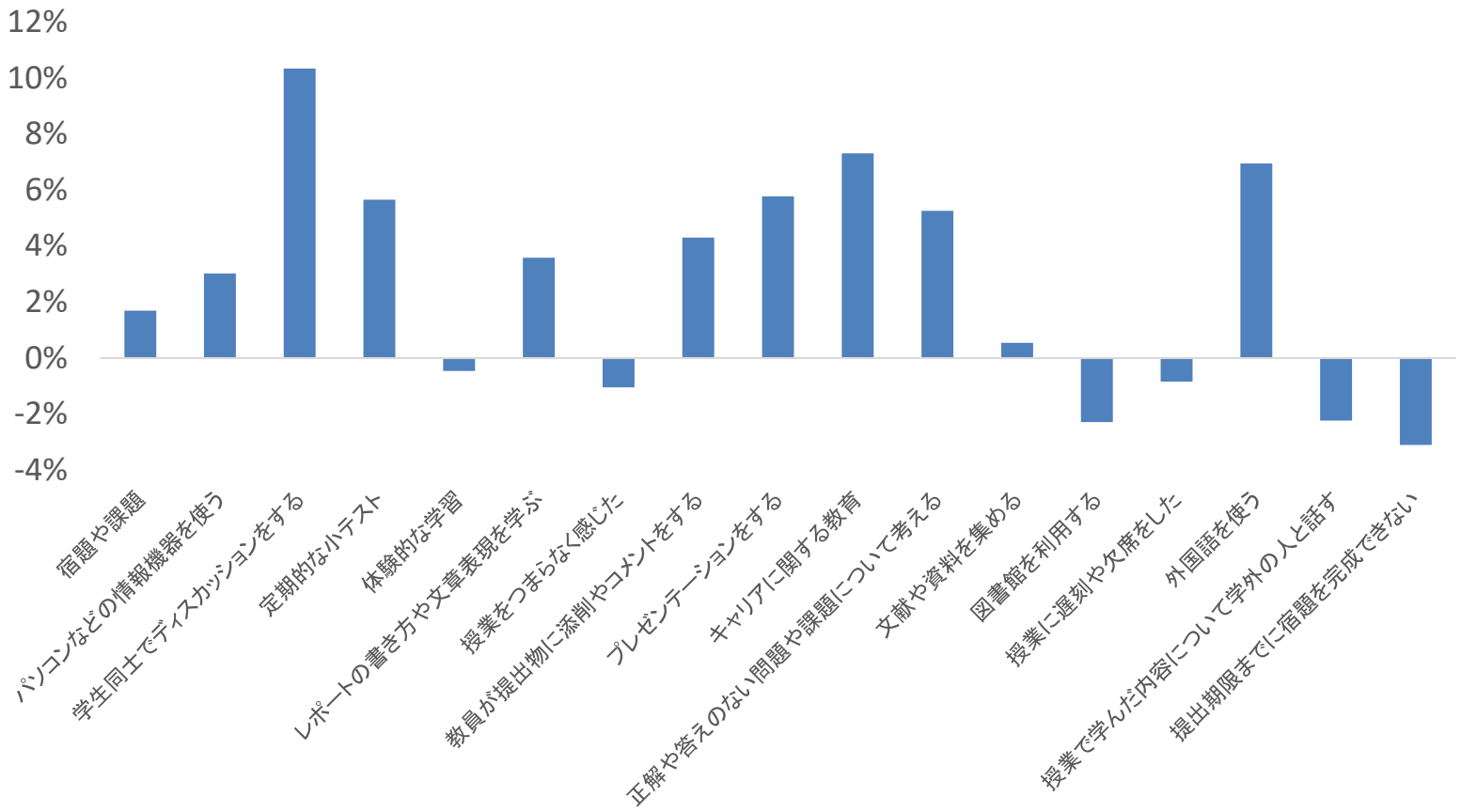
短期大学での学習経験（1）

授業における経験のうち、「ときどきあった」「よくあった」を合計したものを比較すると、2018年の方が高い傾向にある。



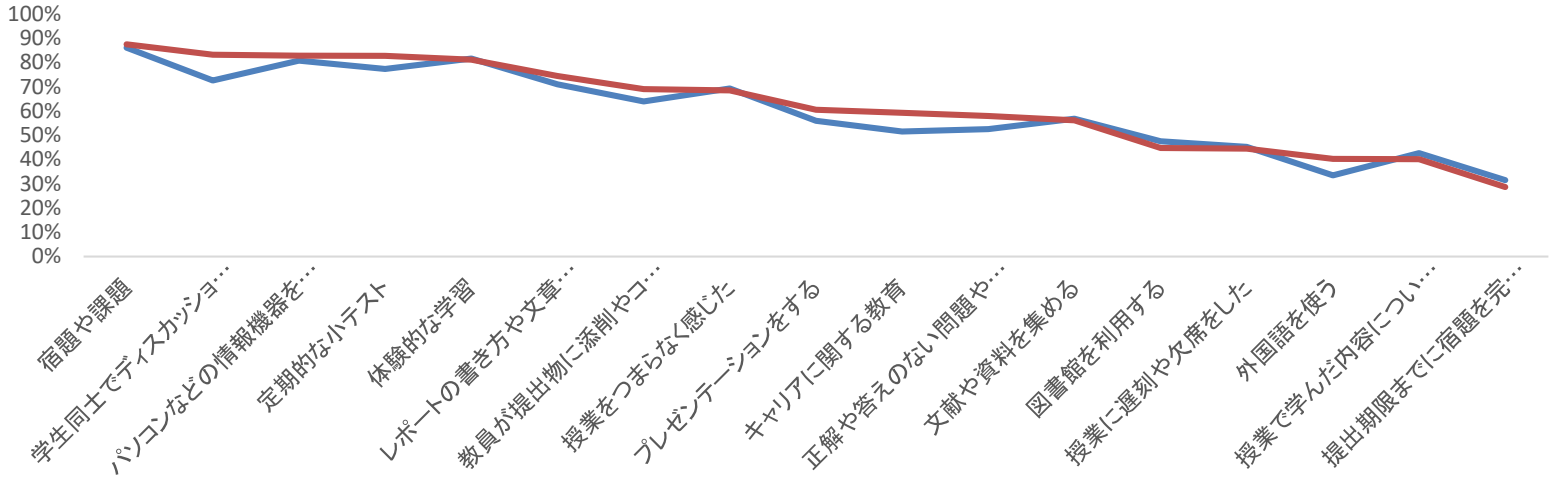
短期大学での学習経験（2）

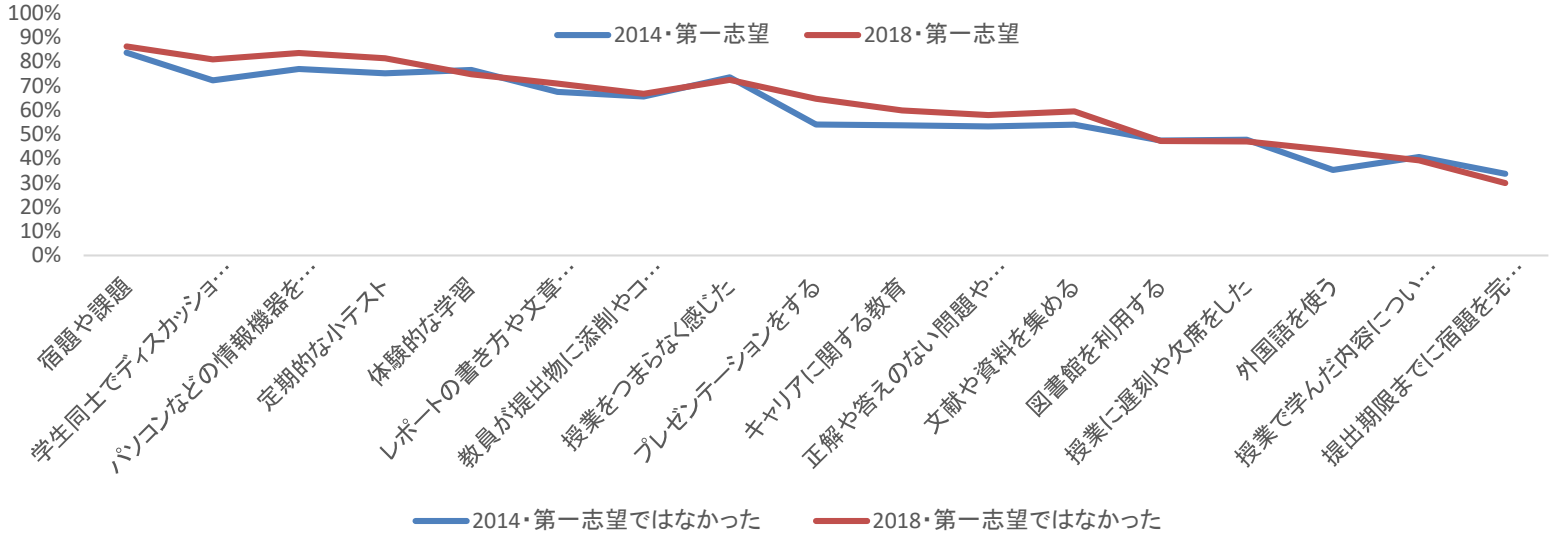
「学生同士でディスカッションする」や「プレゼンテーションをする」といったアクティブラーニング項目は上昇率が高い傾向にある。



短期大学での学習経験（3）

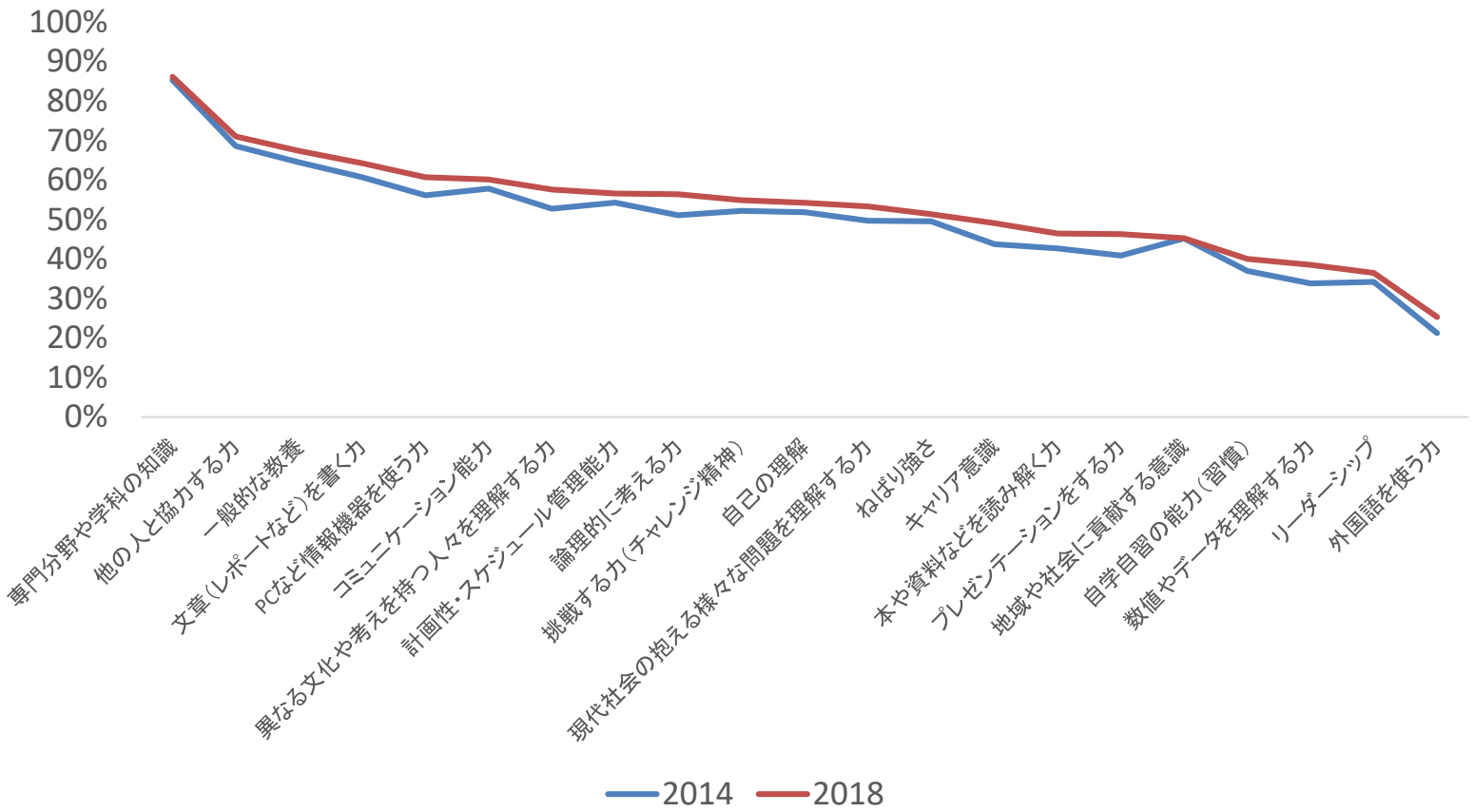
学習経験については、志望順序では大きな変化がみられず、概ね各年度ごとの状況が反映されている。





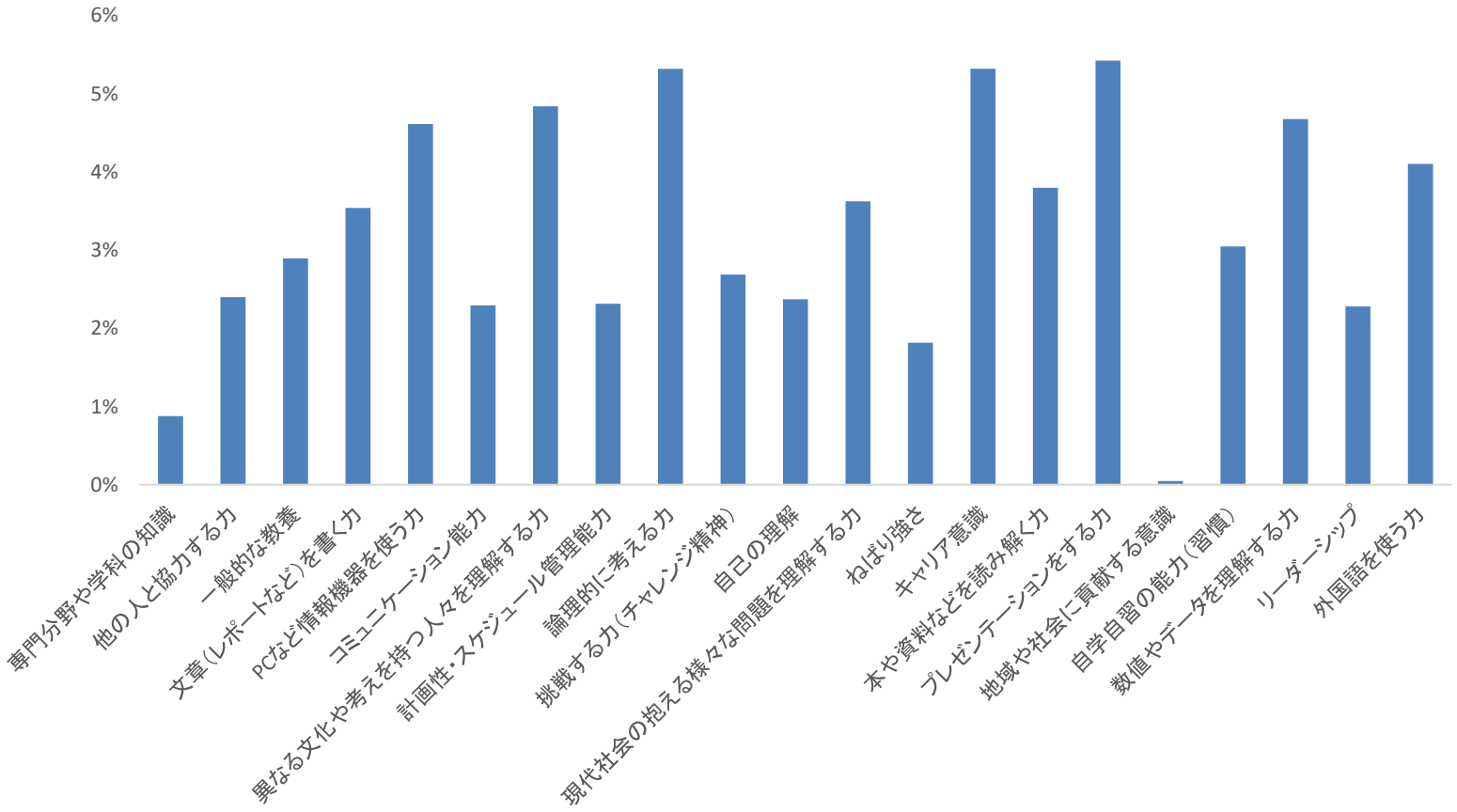
短期大学入学後の知識・能力の変化（1）

全体の能力・知識の変化をみると、専門分野の知識や一般的な教養に関する知識等については知識・能力が向上している。



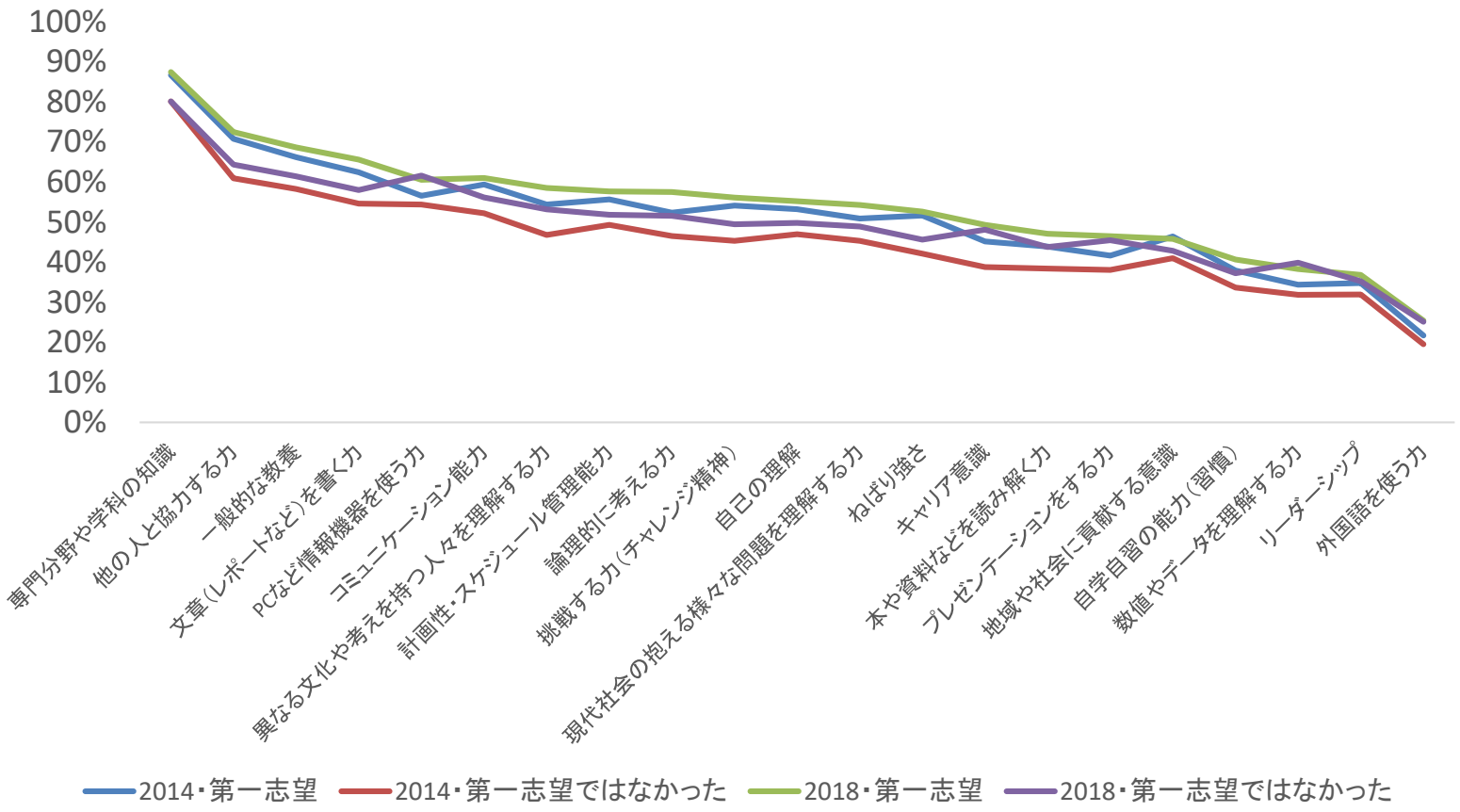
短期大学入学後の知識・能力の変化（2）

知識・能力の変化は、「プレゼンテーションをする力」や「キャリア意識」といった近年重視される項目が上昇傾向にある。



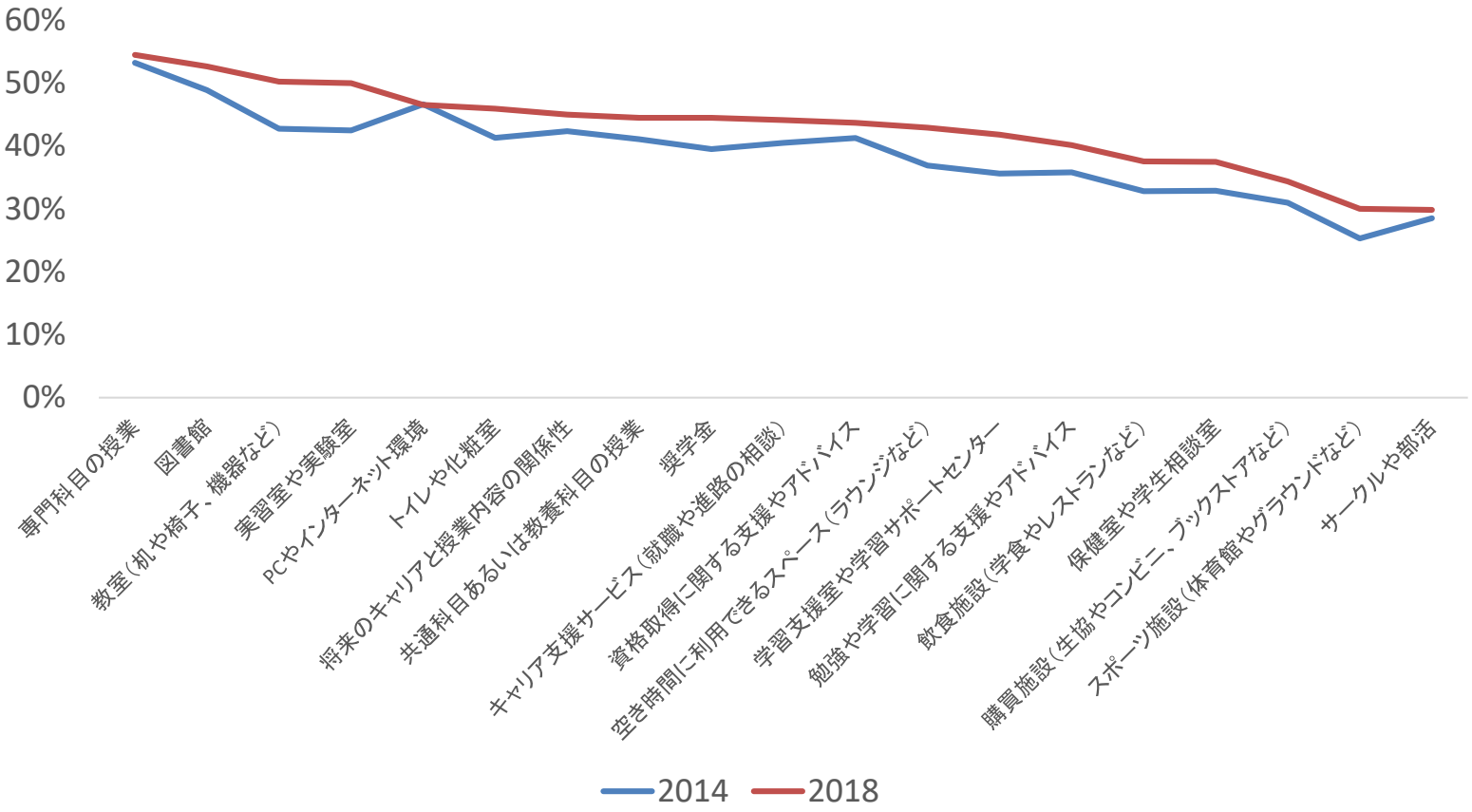
短期大学入学後の知識・能力の変化（3）

第一志望の学生の方が全体的に高い傾向にあるものの、第一志望以外の学生についても高い傾向にある。



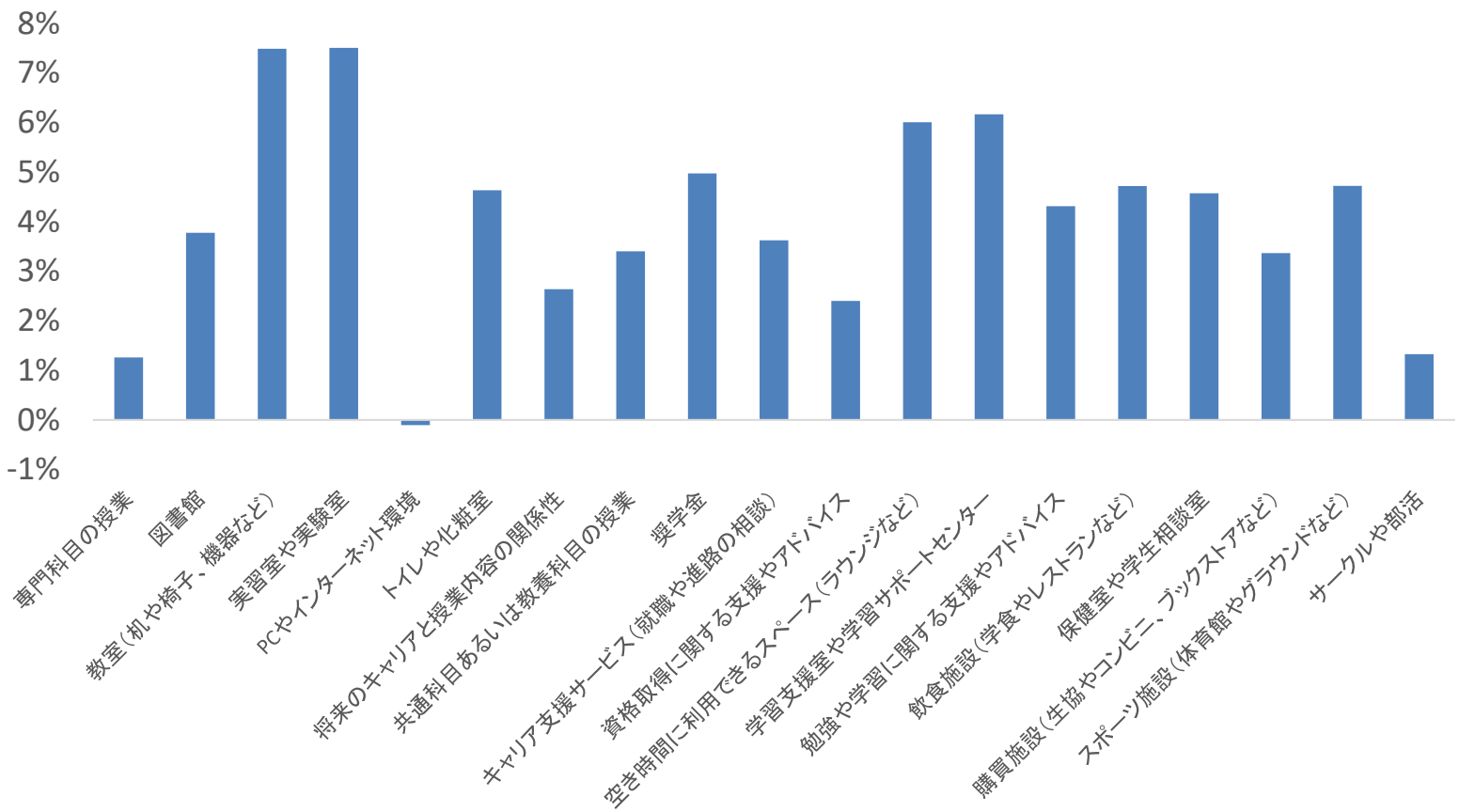
短期大学に対する満足度（1）

短期大学に対する満足度は、2014年よりも2018年の方が全体的に高い傾向を示している。



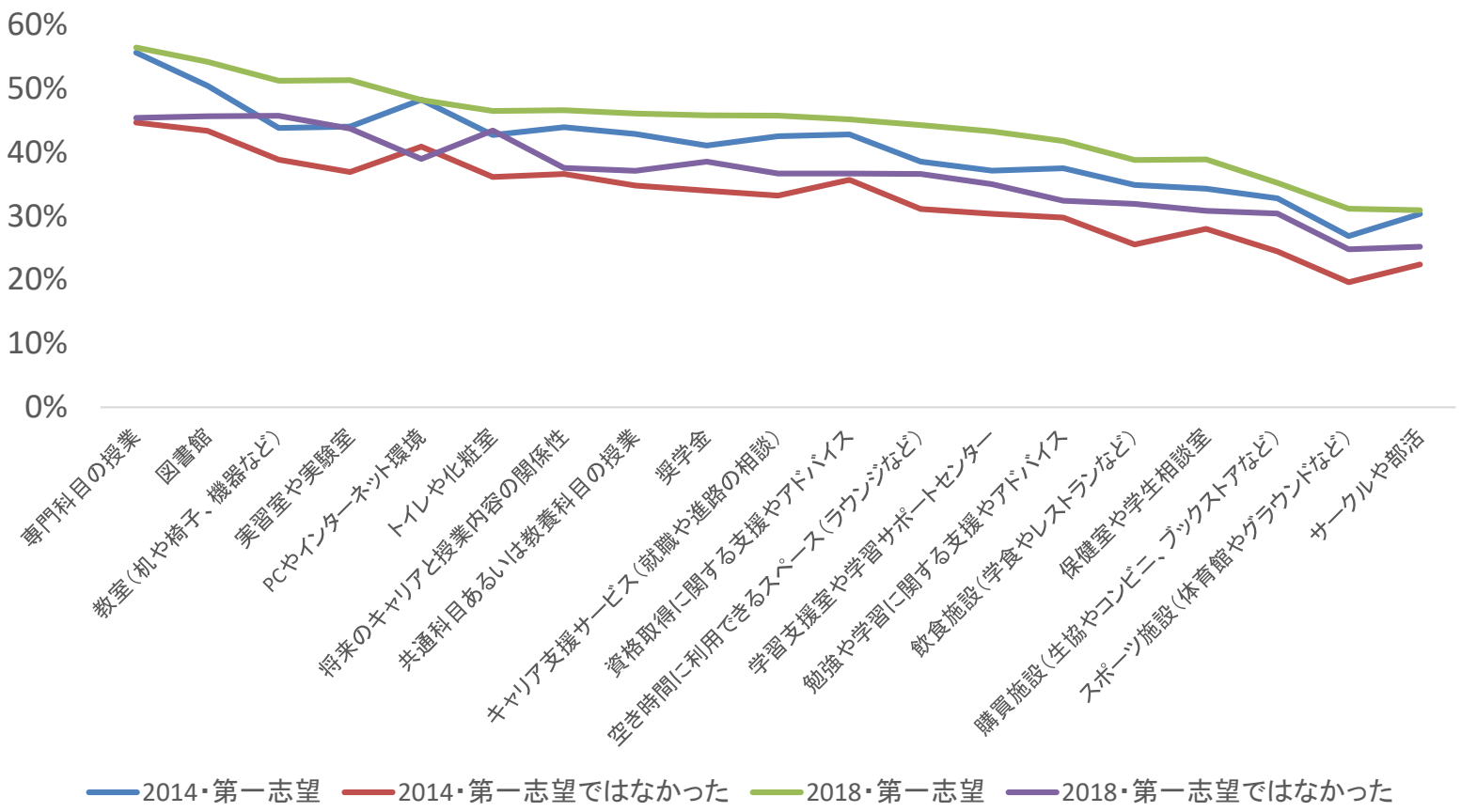
短期大学に対する満足度（2）

「教室」や「実習室や実験室」、「学習支援室や学習サポートセンター」などの施設・設備面への満足度が上昇傾向にある。



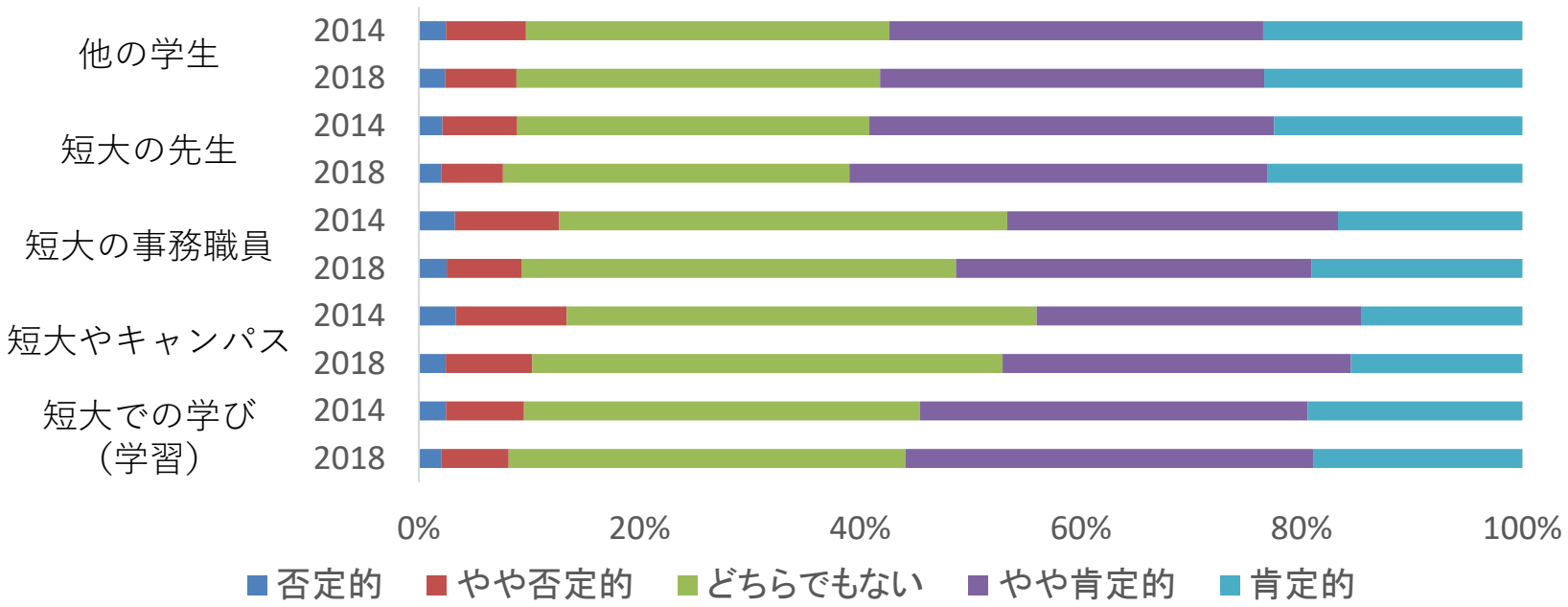
短期大学に対する満足度(3)

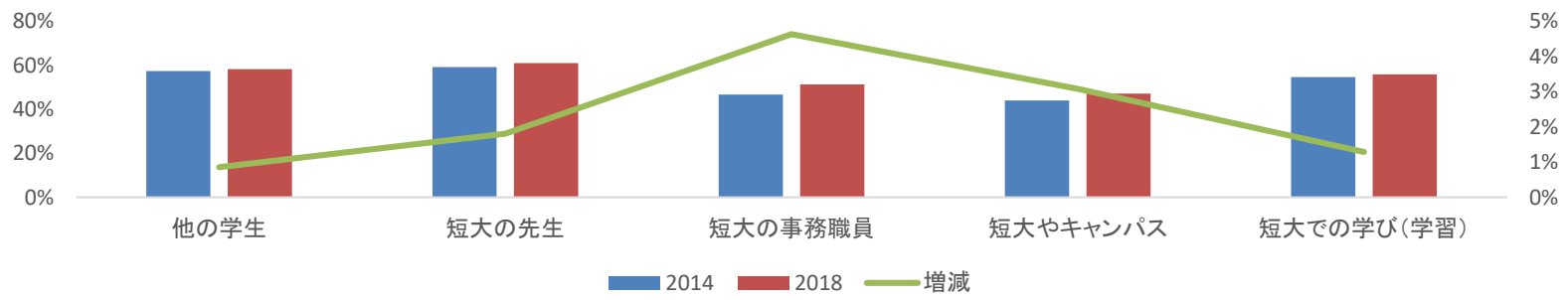
第一志望の学生の満足度が高い傾向にあるものの、2018年では第一志望以外の学生もやや上昇している。



短期大学に対する総合評価

短期大学全体の、総合評価をみると、概ね肯定的に捉えており、2014年と2018年を比較すると2018年の方がやや高い傾向にある。





まとめと今後の検討課題

今後の課題

・個別データの収集と分析

　本調査では全体像の把握は可能であるものの、個別短期大学　の情報を分析することは難しい。より詳細に分析を行うために、教学データとの紐づけ等が必要である。

・卒業生調査との連携

　より正確に学習成果を測定するには、卒業生に対する調査が必要不可欠なものとなる。その際に本調査項目を考慮した調査を実施することが必要である。

まとめと今後の検討課題

・分析結果を用いた政策提言や情報発信

　短期大学は現在の高等教育政策においては、位置づけが不明瞭な機関となっていることから、それに対する政策提言や情報発信を積極的に行う必要があり、そのための追加のデータ収集等を進める必要がある。

参考文献

・短期大学基準協会「短期大学生調査パンフレット」
・中央教育審議会，2014，「短期大学の今後の在り方について（審議まとめ）」
・文部科学省「学校基本調査報告書」
・文部科学省「短期大学について（http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/tandai/index.htm,2019.05.31)

※短期大学生調査については、以下のサイトをご覧ください。

http://www.jaca.or.jp/service/other/research/tandaiseichosa.html

ご意見・ご質問等がございましたら、
以下のメールアドレスまでお願いいたします

217k1003@s.obirin.ac.jp（宮里）
osakai@oita-u.ac.jp（堺）